

## 2017年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

|             |                            |
|-------------|----------------------------|
| 2017年1月8日   | 「まづ神の国と神の義を」               |
| 2017年1月15日  | 「全托の信、全托の祈り」               |
| 2017年1月29日  | 「人新たに生れずば」                 |
| 2017年2月5日   | 「永遠の生命にまで至る糧のために」          |
| 2017年2月19日  | 「狭き門、細き路」                  |
| 2017年2月26日  | 「望みて喜び」                    |
| 2017年3月5日   | 「『十字架・聖霊』の体受」              |
| 2017年3月12日  | 「求めの切なるにより」                |
| 2017年3月19日  | 「マリヤとマルタ」                  |
| 2017年3月26日  | 「人新たに生れずば」                 |
| 2017年4月2日   | 「神の奥義なるキリスト」               |
| 2017年4月9日   | 「愛」                        |
| 2017年4月30日  | 「一切の秘訣」                    |
| 2017年5月7日   | 「日々の生活における讃美と祈り」           |
| 2017年5月21日  | 「聖旨の如く我に成れかし」              |
| 2017年5月28日  | 「聖霊降臨節を前にして」               |
| 2017年6月4日   | 「聖霊の降臨」                    |
| 2017年6月18日  | 「愛」——神の愛、神への愛、人への愛——       |
| 2017年6月25日  | 「愛」——ヨハネ第一書より——            |
| 2017年7月2日   | 「神の義、神の愛」                  |
| 2017年7月9日   | 「福音の継承」                    |
| 2017年7月23日  | 「一粒の麦、地に落ちて死なずば」           |
| 2017年7月30日  | 「真の礼拝」                     |
| 2017年8月6日   | 「我を食らい、我を飲め」               |
| 2017年8月20日  | 「新しき人」、「旧き人」               |
| 2017年9月3日   | 「神様からのラブレター——ヨハネ伝」         |
| 2017年9月10日  | 「旧約の福音」                    |
| 2017年9月17日  | 「神の奥義なるキリスト」               |
| 2017年9月24日  | 「主に出会い、主と語る」               |
| 2017年10月1日  | 「御霊の賜う自由」                  |
| 2017年10月22日 | 「わが福音」                     |
| 2017年10月29日 | 「福音書を読む」(第1回)              |
| 2017年11月5日  | 「祈り」——福音書を読む(第2回)——        |
| 2017年11月12日 | 「テモテ前・後書の意」                |
| 2017年11月19日 | 「最も大切な誠め」——福音書を読む(第3回)——   |
| 2017年11月26日 | 「荒野の試み(靈戦)」——福音書を読む(第4回)—— |
| 2017年12月17日 | 「マリヤとエリサベツ」                |

## まず神の国と神の義を

2017年1月8日

聖書朗読 イザヤ書60章1～5、19～22節

新しい年を迎えた。まず、各地にあつて京都の集会を覚えて祈ってくださっている兄弟姉妹に、主の導き深からんことを祈る。次に、聖書朗読箇所は、イザヤ書60章の力強い励ましの言葉だった。

「起きよ光を<sup>はな</sup>発て、なんじの光きたり、主の栄光なんじの上に照り出でたればなり」

この御言葉は、「主キリストの光が輝くぞ。思い煩いや憂いを打ち払い、主の力を受けて勇ましく進みなさい。」と響いてきた。今日の講筵は、まず詩篇から「光」に関わる御言葉を拾った。詩篇19篇、27篇、28篇、33篇、34篇などであり、これは各自で読んでいただきたい。今日の主題は、「まづ神の国と神の義を」だった。大きな問題であり講筵内容を手短に紹介できるものではないので、以下、注目した御言葉を中心に記載する。

① まず、マタイ伝6章25～34節を引いて話された。先生は、若い時代に生活のこと将来のこと人生のことなど、自分一人で背負い、考えなければならぬと思う、その重圧と思い煩いから、呻き苦しむ日々だった。しかし、キリストに救われ、このマタイ伝の御言葉に出会い、「なんと慰め深い！」と感じると共に、自分にばかり向けていた目をキリストに向け、徐々に憂いから解放されたと話された。

② 次にロマ書1章16節～17節を引かれ、「神の義はその福音のうちに顕れ」とあるように、神の「義」はその奥に「愛」を秘めており、我々が受けるべき「裁き」をキリストが十字架上で受けてくださったことにより、「義」は「愛」の貫きとなって顕れた、即ち、「裁きの義」が「救いの義」となった、この「救いの義」は我々の側の立派さなどとは関係なく、無条件に与えられるものであり、それを「ハイ」と受け取ることが「信仰」であり、それに徹して歩む者が「義人」とであると話された。

③ ロマ書3章19～31節、ガラテヤ書2章、3章は、「義」に関し注目すべき御言葉が多い。中でも、

「然るに今や律法の外に<sup>ほか</sup>神の義が顕れたり、これ、イエス・キリストを信ずるに由りて与えたもう神の義なり。」(ロマ3・21～22)  
がそれである。

④ ピリピ書3章、4章も注目。先生は、同書3章9節「律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基づきて神より賜る義を保ち……」を引かれ、「己が義」ではなく「神より賜る義」であることを強調された。



## 全托の信、全托の祈り

2017年1月15日

### 聖書朗読 詩篇139篇1～18節

皆様、お久しぶりです。司会のKです。これからまた、定期的に司会を務めさせていただき、主様とのつながりを強めて、主の御心を体現する生き方・働き方ができるようにと願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

この日（1月15日）の聖日集会では、詩篇を中心に主の御心を学び味わいました。奥田先生は、

「主から全托<sup>ぜんたく</sup>の信仰が与えられているからこそ、全托の祈りができる」

と話され、そのテーマに沿って、いくつもの詩篇の箇所やヨハネやパウロの言葉を紹介されました。先生が、

「聖書は、好きな食べ物を食べるように、自分にとって都合の良い所を中心に味わえばよい」

と話してくださいったことが印象的です。確かに聖書は外国の民族の歴史の上に成り立っているのです、それだけで馴染<sup>なじ</sup>みにくいし、距離を感じてしまします。そんな聖書から神様の御心を探し出そうとすれば、自分にとって親しみやすいところを味わうのが一番だと思います。主様は、主との交わりの中で我々を祝福し、世が与えることができない平安を与えることで我々を幸せにしたいと考えておられます。これからは、そのことを念頭に聖書の御言葉を楽しむと思います。

先生は、休息所ではなく戦いの場であるこの世において、苦しい自分の気持ちを主に訴えて、主に甘えているような詩篇を好まれます。我々は頼りない人間だからこそ、主にすることが出来ます。我々の中にある弱さは、戦いの場であるこの世では不自由な足かせに感じることがあっても、その弱さのために主にすがり祈ることができ、その切実な祈りに応えて主が知恵や力や平安を与えてくださることを考えれば、その弱さはかえって良いということになります。

また、我々はどこまでも幼子のような姿で良く、幼子の魂だからこそ、

「神は我等の避け所、また力。主の慈しみはいのちにまさる」（詩篇46篇1節、

62篇8節、63篇3節）

ことになります。キリストは、

「人は幼子<sup>わかご</sup>のようにならなければ、天の国に入ることはいできない」

と言われました。天の父を体現された、慈しみ深い主キリストが我々の背中を押してくださいているはずですよ。



## 人新たに生れずば

2017年1月29日

聖書朗読 ヨハネ伝3章1〜15節

今日の講筵では、ヨハネ伝3章と6章を中心に、神様が私たちに何を求めておられるか、どのように生きることが望んでおられるかを語られました。

「人あらたに生れずば、神の国を見ること能はず、人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能はず」（ヨハネ3章3、5節）と。

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」（ヨハネ6章63節）

の各聖句は相即不離の關係にあり、永遠の生命に至る生き方をするには新たに霊の誕生をしなければならぬことを語っています。人の生まれながらの姿は、自分中心であり、どのように生きようとも最後には土に還ってゆく有限の存在です。しかし、この世界には、もう一つ高い次元の存在形態があります。すなわち、絶えず生命が溢れ出ている神様の永遠の世界（実在界）で生きる在り方です。神様は、永遠の世界の生命を与えようとしておられますが、生まれながらの私たちは、自らの力では天の次元の実在界に入ることとはできません。

十字架のキリストを体受してキリストの御霊が私たちに内住した時に初めて霊なる次元がわかり、天の次元の命をいただくことができるのです。

キリストは、私たちを肉の人から霊の人に変貌させた後も、さらにいつそう霊的に成長させて、私たちに世の光、地の塩として世のために尽くす使命を托されます。キリストは、私たちを霊の人として新たに生まれさせ、霊の人としてキリストと同じ道を歩んでゆく使命を果たすことを托されたのです。

そして、自分の内にキリストの御霊を宿して生きて行きますと、苦難に出会っても自ずから力が湧いてきます。キリストから与えられた使命を果たして行く時には、外なる人は破れても内なる人は日々新たとなり（コリント後書4章16節）、この世において患難はあっても、雄々しく立ち、世に勝つことができるのです（ヨハネ16章33節）。



## 永遠の生命にまで至る糧のために

2017年2月5日

聖書朗読 ヨハネ伝6章24～40節

「朽つる糧かてのためならで 永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与へんと為するものなり、父なる神は印して彼を証し給ひたるに因る」(ヨハネ伝6章27節)

永遠の生命にまで至る働き方は、何をしているかではなく、どのような心根で働いているか？ 地上でのその人の在り方が、問われています。

その在り方とは、御霊様を頂いて天国人に相応ふさわしい働きをさせていただく事、言い換えるとキリスト様がいっしょに働いてくださる事。働き方、在り方そのものがキリスト様と共に生きている生き方です。

奥田昌道先生は、福音伝道者と法律学者の二足の草鞋わらじを履きながら霊言を召団員に与え、キリスト様の心と一つになって脈打たれて居られ、勤勉さと徹底的に仕事をするこの模範をも示し、仕事の速い、熟練した働き人で、実業に励み、霊に燃え、主様に仕えておられます。法律相談に従事した時、接するすべての人に希望と力を与えることが、先生の食物であり飲み物であった。日本学士院においても、託された任務(公開講演など)を全うすることができたのも、主様の導きと護りの賜物であることを語られました。また先生は、日常の生活においてさえ、キリスト様の栄光が現れて行く働き方を教えてくださいました。労働で固くなった先生の背中では、キリスト道の伝道者としての感動的な訴えの迫力を少しも損じなかった。

インマヌエルの十字架旗の下、召団で毎週学ぶ私たちは、いのちからいのちに至らせる香りとなるものが与えられるという確証を受けます。





## 狭き門、細き路

2017年2月19日

### 聖書朗読 マタイ伝7章7～29節

今回の聖日集会は、京都マラソンと重なり、たくさんの方々が鴨川沿いを走っているのを集会場から見ることができました。我々は人生という名のマラソンを、讃美歌370番「めさめよ、わが霊」のように主のみ声に導かれて力走し、勝利し、その誉れは「我が主の力です」と腹の底から叫びたいものです。

奥田先生は、京都召団の集会員の皆に、より積極的になってもらいたいの願いから、読書会のような形でテーマを決めて宿題を出していこうと考えておられます。小池先生の御本が中心になるかと思いますが、小池先生が受け取られた福音を我々がしっかりと理解し、自分の血肉とし、自覚をもつて主を証ししていく大事な機会になると思います。共に学び合うことで理解もより深まるのではないのでしょうか。

また、奥田先生は、京都召団を一つの主の証言体と考えておられます。集会員がてんでんばらばらに存在する集会ではなく、召団の理念を共有した者たちが一致団結して主を証ししていくことを願っておられます。我々は京都召団という船に乗り、主様という船長の下、主を証しする航海に出て、主の御国を目指す旅に出るといったイメージでしょうか。乗組員にはそれぞれに役割があります。

皆で楽しい時も苦しい時も共有し、互いに助け合い担い合つて主の御国を目指す旅に出ましょう。

京都召団は、キリストの証言体として、キリストの一つの体と捉えます。集会員一人一人はキリストの体を形作る大事な各部です。身体に不要なパーツはありません。また、どのパーツが偉いなどありません。互いに連動し助け合います。このことから、京都キリスト召団は利己的な個人主義ではなく、かといって個々をないがしろにする全体主義でも決してありません。主の下で御言葉と祈りを共有する、キリストの証言体です。

奥田先生は、小池先生が主から受け取られた福音の重要性を認識しておられるため、それを受け継ぐ京都召団のこの世やキリスト教界での立ち位置や役割を明確にしたいという思いが強いです。しっかりと学んでいきたいです。



## 望みて喜び

2017年2月26日

### 聖書朗読 ロマ章12章

2月28日は、Y奥様のご逝去から5周年の日です。現在のように、新館で落ち着いて祈ることができるのは、奥様の悲願でありました。その思いを大切にして、これからも、新館を尊い祈りの場として活用してゆきたいと願っています。

今日は、ロマ書12章、ヘブル書11章、コリント後書4章を中心にして、信仰とは何であるかという根源的な問題についての講筵をされました。

多くの人は、目の前に見えるもの、知覚することのできるもの、すなわち、自然界や人間界に形をとって現れる現象だけが認識可能であり、その背後にあるものは不可知であると考え、見えないものを無視しがちです。

しかし、聖書は、目に見える現象の奥にあるものがリアリティであり、それを信じて生きることによって確かな人生を送れること、見える世界に頼って歩むことよりも、見えない世界を信じて歩むことがいかに人生にとって大事であるかを述べています。

### ヘブル書11章の

「望むところを確信し、見ぬものを真実とする」

生き方、コリント後書5章7節の

「見ゆる所によらず、信仰によりて歩む」

すなわち、現象の背後にあるものを受け取る生き方ができると、目の前の出来事に動揺することはなく、同じ外的状況（現象）のもとにあっても、絶望に陥るのではなく、平安の内におられます。どこからか、「大丈夫だ、心を騒がすことはない。」という励ましの言葉が響いて来ます。そして、今は、見えてないけれども、必ず主が成就してくださるという希望が湧いてきます。そうすると、ロマ書12章12節に

### 「望みて喜び」

とあるように、患難に耐えて困難な事態の中にあっても喜びが湧いてきます。私たちの望みが、自己中心的なものでなく、主から賜ったものであれば、主が成就してくださるからです。そして、有難いことに、クリスチャンは、望みを持つことができる特権を与えられています。

しかも、その特権は、主から賜る聖霊の力によって保証されています。聖霊が私たちに絶対の安心を与えて心を強くしてください（コリント後書5章5節参照）。

神様は、御心にかなう望みは必ず成就させてくださいます。神様のご計画を信じてそれを受け取り、新たな完成に向かって進む人生を送っていただくことを願っています。



## 「十字架・聖霊」の体受

2017年3月5日

聖書朗読 コリント前書1章18〜31節、ガラテヤ書3章1〜6節

今日の講筵は、小池辰雄先生の『キリスト告白録 第4巻 狭き門』の中から、「唯一のもの」(1974年11月17日京都における講筵)を取り上げ、大事な箇所を中心に読んでいった。奥田先生は、昨日(3月4日)、東京キリスト召団新宿集会の読書会で、この箇所の解説をされており、その時受けたホットな感動をそのまま、今日の講筵で語ってくださいました。奥田先生は、講筵の初めから熱く語られ、

「小池先生の告白の中心は『十字架と聖霊』にあり、その恵みを私たち一人ひとりが真に受け取っているかが問われている。皆さん、聖歌521番にある『キリストにはかえられません』の姿に、生活の中で徹していますか。聖日集会を第一としていますか。」

と問われた。

以下では、今日、奥田先生が大事な箇所として取り上げられた告白録の箇所のうち、私自身が心に残った処を一部記載してみる。

① キリストと一つになったら、キリストは私たちの生命を内側から創造してください。このキリストの生命の他に生命はない。「我は復活なり、生命なり」を直ちに受け取る角度で読んでいかなくてはいけない。キリストの生命は無限無量だから。

② キリストは、(人の思いでは)不可能な言葉を言っている。その不可能を可能にさせるキーポイントが「キリストの十字架」です。その十字架が自己義認の罪をご破算にし、私心のない、自己のない場に入れてくださる。そこに神、キリストの霊という「聖霊」の渦が入ってくる。

③ キリストの手、足、口となることによつて、キリストの栄光が現れる。聖名を讃美する。それが我々の人生の意味であり目的である。

奥田先生は、小池先生が三日三晩断食して祈って霊の世界に深く入ったとある箇所や、十字架、聖霊の愛を告白して止まなかった姿を実見した者として、改めて今回、告白録を読み、その祈りの姿に感動したと話された。そして、その福音を正しく伝え、その霊灯を後世に伝える義務が自分にはあるとされた。また、私たちに、告白録のエッセンスを今後とも熟読、体受するとともに、ガラテヤ書3章にある如く、

「己を乗り越えて進んで頂きたい」

と熱く勧められた。終わりに再度、「キリストにはかえられません」を歌い、普段より短かったが、キリストの熱愛あふれる集会を閉じた。





## 求めの切なるにより

2017年3月12日

聖書朗読 ルカ伝福音書11章1～13節

「求めの切なるにより、起きて其の要する程のものを与へん。」（ルカ伝11章8節）

今日は、しつこく願った「たとえやもめの譬」と「真夜中にパンを求めた友人の譬」から、「切に祈り求めること」の大切さを学びました。

イエス様は、十字架で命をかけてくださったので、求める方の求めも、命がけの求めでなければなりません。イエス様は、私たちの「日ごと祈らないではいられない」祈りの本気度を見ておられます。

「イエス様！ あなた御自身が居てくださらないと私はどうにもなりません！」と本当にどこまで真剣に、全存在を賭けての祈りを、全托の祈りを、しているか。

実は、イエス様は、ご自身を私たち一人ひとりに与えようとなさっているのです。

「まず神の国と神の義を求めよ」

との主の御意は、

「私（イエス）を求めなさい。私は、あなたと一つでありたいから」と願っていただくのです。

祈りにおいては、真つ先にキリスト様の十字架を瞑想し、あわれみ深い救い主のいつくしみにすがりながら、自分を見ないでキリスト様だけを見て平伏すと、聖霊様が臨まれキリスト様と一如になります。

こうして私たちの信仰（神交）は強められ、天の力が助けとして与えられます。

たとえサタンが私たちの往く道（キリスト道）に積み上げた邪魔物が、永遠の山のように乗り越えることが不可能に見えても、それは神交の切なる祈りの前には雲散霧消してしまうので大丈夫です。



## マリヤとマルタ

2017年3月19日

### 聖書朗読 ルカ伝10章38〜42節

近頃、集会に集う方が少なくなってきました。奥田先生が最後の祈りの際に祈られたように、京都召団は、自分よりもキリストを第一とする人でなければ満たされない集会です。キリストがおられなければ、自分の命はとうに無いという思いの人が集まる集会です。主ご自身が我々の魂が救われる為に、十字架で命を捨ててくださったのだから、従う我らもまた命がけの覚悟が求められます。言えることは、命がけでキリストにぶつかっていく人は、必ず道が開かれるということ、主はそのような者を決して見捨てられないということ、そして、主の御霊・聖霊による心の平安は、この世の何物にも代えられない恵み・喜びであるということです。

今回の集会のテーマは、マリヤとマルタの記事から、

「クリスチャンは、この世の仕事をおろそかにして良いのか」

ということでした。この記事は、読みようによつては、働きのマルタが主からいさめられ、働かず主の傍にいるマリヤの方が正しいと受け取れます。しかし、主は、忙しく立ち働くマルタの心が平安でないことを指摘され、いろいろなことがあっても思い悩まなくて良い、私に委ねてきなさいと優しく諭しておられると、奥田先生は受け取られました。

我々はすぐに思い悩み、心を乱してしまいます。だからこそ、主がおられ主が必要なのです。そして、思い悩むのも心を乱すのも、一生懸命働いているからこそ生まれるのであって、その苦しみや大変さを味わっているからこそ、主の偉大さが分かり感謝できるのでないでしょうか。

我々は、この世で、主にあつて成すべき務めを果たす必要があります。そうでなければ、この世の人から信頼されません。この世の人と同じように、この世で働かなければ、この世の人の苦しみは分かりません。何よりも、主こそが一番働かれたのです。奥田先生は、世の中で活躍するスポーツ選手など、クリスチャンであるかどうかではなく、その人の在り方・生き方を見て、立派だと思えば認められます。そのような姿を見て、逆に、クリスチャンとしての自分はどうなのか？ と自らに問いかけられます。



## 人新たに生れずば

2017年3月26日

## 聖書朗読 ヨハネ3章1～15節

今日は、N兄が、長い介護の努めを果たしてご母堂を天に送られたこと、これからは主様ののみを見つめて進んで行くことを証言されました。主様は兄の思いを受け止められ、与えられた使命を果たすために、兄に聖霊の力を与えられることと思います。

今日の講筵において、先生は、

「私たちの生き方は、神様から何をしていただくかではなく、神様のために何をするかを最大の関心事とすることです。自分に何かして欲しいと求めるのではなく、主様のために何を捧げることができるか、何をもって主様の御思いに応えてゆくのが重要です。主様から命をいただいたからには、主様のために命を捧げたいという、自分を神様に捧げてゆく生き方が求められます。」

と明確に語られました。そこに至るには、まず、何の罪もないキリストが、ゲッセマネの祈りの後に、決然として神様の命令に従われ十字架に架かれたこと、彼らを赦したまえと祈られたことの意味を深く受け取らなければなりません。また、アブラハムが神の命令に従い、最愛の子イサクを捧げて信を貫いた、その捨て身の姿に学ばなければなりません。これを受け取って初めて、コリントの信徒への手紙25章14～15節に

「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」

と記されていることを把握することができるのです。

私たちの生涯そのものを神様に捧げることが、時には厳しい狭い道を通らされることもあります。しかし、そのような時に求められるのは、この世に執着しない姿勢です。この世のすべてを捨てきれないと、キリストの弟子にはなれないのです。主様の与えられるものは、天の次元のもの、この世とは相反する新しい霊の命です。主様に全託してそれを受け取り新生するか、この世にしがみつくかで、人生は大きく分かれるのです。

私たちにはキリストが付いておられます。キリスト以外のことを求めないで、キリストに委ねきつてほしいと願っています。そして、霊のパン（霊言）を頂いて霊を養い、霊の次元でイエスと一体となり、私たちの全生活が天の次元にあるような気持ちで日々を歩んで行きますと、聖霊が正しい道を示して、日々、新しい命をくださいます。また、私たちに、霊の子を生み出し導く使命を与えられます。神様に、「御心をお示してください。あなたは私に何を求めておられますか？」と絶えず問いかけて進みましよう



## 神の奥義なるキリスト

2017年4月2日

### 聖書朗読 コロサイ書3章1〜4、9〜17節

春らしい陽光とともに新年度が始まり、新しい任地での生活をはじめられた方、新たな役割をいただいた方など様々だろう。春の喜びが皆さんの心に満ちますように。

今日の講筵は、パウロの手紙「コロサイ書」を取り上げ、心に迫る御言葉に注目しながら全4章を学んだ。奥田先生は、コロサイ書について、この書は神様の目線で、私たちがキリストにある者が如何なる存在であり、世にあつてどの様な心根で過ごすべきかを簡潔に語ってくれていると語り出された。

以下、先生が注目された箇所をたどつてみたい。パウロは第1章の始めに私たちのために次のように祈り求めている。

「汝ら霊のもろもろの智慧によつて神の御意を具に知り、凡てのこと主を悦ばせんが為に御意に従いて歩む」

ようにと。また、凡てのことに忍耐を用い、キリストの十字架に由つて暗黒の権威から救い出してくださいと神様への感謝を忘れないようにと述べる。クリスチャンにとって人生は真に忍耐の連続と言えるが、艱難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生じさせることになる。ヘブル書も忍耐の必要性を述べている(10章36節)。

続いて「奥義」ないし「神の奥義なるキリスト」の言葉に注目した。キリストには智慧と知識との凡ての宝が隠れており、神様に満ちあふれている徳は凡てキリストに宿つていとある。先生は、神の奥義とはキリスト御自身であり、私たちはキリストの言葉、行いの中に深い智慧(靈知、英知)を見て、それを祈り求めていくことが大切であるとされた。また、エペソ書2章4節以下を引かれ、キリストの愛が先にあり、それが私たちを活かし、甦らせ、天の処に座らせてくださったのであると強調された。

コロサイ書3章では、慈悲、謙遜、柔和、寛容など「キリストの平和」を基とした具体的な生活指針が語られ、讚美と感謝、互いの忍耐と許しが勧められている。個人の間でも集会としても心すべきことである。コロサイ書にあるこれらの宝物(御言葉)を「愚か」とするか「神の能力、智慧」とするか、路は二つに分かれている。最後に詩篇119篇から、日々の生活に力となる御言葉を幾つか拾った。

「なんじの聖言は、わが足の灯火、わが路の光なり。」(詩119・105)





## 愛

2017年4月9日

## 聖書朗読 ヨハネ第一書3章1〜3、13〜24節

桜が満開の季節となりました。主の聖霊を頂くようになってから、桜の美しさが本当によく分かるようになりました。この恵みが私から離れず、増し加えられることを切に願います。いよいよ主が私を通して働かれるよう、この身を捧げていきたいと思えます。

今回の奥田先生のお話は、

「人生において、無くてならないものは？」

というテーマで進められました。

我々が肉体を維持するためには、食べ物飲み物が必要です。では、精神や心を維持するためには、何が必要なのか？ ある人にとってはお酒かも知れません。仕事かも知れません。家族かも知れません。趣味かも知れません。

その答えを奥田先生は、来週に迫った公開講演会の準備の為に、主に祈られる中で、「愛」であるとされました。

「無くてならないものは？」というテーマでキリストを説く時、人は何を売りにするのか？ 聖書や宗教に関する幅広い知識なのか？ それとも奇跡の行いなのか？ 奥田先生はそのどれでもなく、「愛」とされました。人生において何をおいても必要なものは、幅広い知識でも奇跡の業でもなく、愛であると。

この答えは、人が驚くようなものではないかもしれませんが。面白味にも欠けるかもしれませんが。しかし、パウロは言います。愛が無ければ、全財産を施しても、命を投げ出しても、神秘に精通していても、山を移す程の信心深さがあっても、その他どんなに凄いことであっても、それらには何の益も無いと。

では、その愛の内容とはどのようなものでしょうか？ 恋人への愛？ 家族への愛？ 仲間への愛？ キリストが我々に求めておられる愛は、「敵のために祈る愛」です。自分のことを悪く言い、認めてくれず、理解もしてくれないような、恩をあだで返すような相手の祝福を願って祈る愛です。神様は我々に到底出来ない事を要求されます。この点において、我々は主に降参する他ないのです。自分の頑張りで敵を愛することは、パリサイになり、他を裁く危険があるので、素直に出来ません、主に委ねますと、主に降参しましょう。



## 一切の秘訣

——ピリピ書より——

2017年4月30日

聖書朗読 ピリピ書2章1～18節

「一切の秘訣を得たり」（ピリピ人への書4・12）

パウロは捕らわれの身であつたが、失望しなかった。それどころか、ピリピ召団に書き送つた書簡には、勝利の調べが鳴り響いている。

「常に主にありて喜べ」

とピリピ人に書いた。

「繰り返して言うが、喜ばない。何事をも思い煩うな、ただ、事ごとに、感謝をもつて祈りと願いとを捧げ、あなたがたの求めるところを主様に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない主様の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあつて護るであろう。」

奥田昌道先生もパウロの如く多くの事をした。キリストに忠誠を捧げて以来、先生の生涯はたゆみない奉仕にみたまされていた。京都から東京へ、日本からドイツへと旅を続け、十字架の物語を語り、福音へと改宗者を導き、（財）京都キリスト召団を設立した。他の諸召団のことも絶えず心にかけて、召団たよりを数多く書き送った。学者の仕事に従事して生活費を稼いだ。しかし、どんなに仕事に忙殺されても、先生は、上に召してくださる主様の褒美を得ようと努めるという、一つの大きな目的を見失わなかった。辛苦と艱難に直面しながら先生を前進させたその偉大な目標こそ、召団の働き人を導き、主様への奉仕に自分のすべてを捧げさせるものである。ひたすら目標に向かって進み、イエス様の御顔を見る望みは、その望みを達成するために必要な努力と犠牲のすべてに値するものであることを、この世の人々に示されて居られます。

主様は何があつても（無因の世界）行き詰まりを知らない天然に処していく一切の秘訣をキリスト・イエス様にあつて満たしてくださり、聖霊様が私の力になつてくださることによつてすべての事が成ると講筵されました。



## 日々の生活における讃美と祈り

2017年5月7日

## 聖書朗読 詩篇103篇

ゴールデンウィークは好天に恵まれ、春の草花が咲き競い、木々の若葉が照り映え、春風が優しく吹き渡って、多くの人が天のめぐみに預かった。

今日の講筵は、前回の集会で話された「無因」に関し、更に言葉を加えて、「絶対・無因の愛」について時間を掛けて話された。奥田先生は、「無因」について、これは「絶対・無因の愛」のことで、「絶対愛」とも言って良いと話し出された。「絶対・無因の愛」とは、人の姿、形にかかわらず、こちらの事情とは無関係に（その意味で原因・理由が無いので無因）、神、キリストの絶対の愛が貫くということ。キリストはヨハネ伝14章で、私たちに「汝ら心を騒がすな」と諭し、十字架の贖いを遂げて栄光のすがたで顕現（復活）すること、助け主「真理の聖霊（御霊）」を与えることを約束され、それを成就してくださった。私たちの「古い我」（神へのそむきの罪）を贖い、聖霊を賜い、新しい生命に生かしてくださっている。

絶対・無因の愛については、マタイ伝5章43節以下に、

「天の父は、その日を悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり」

「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」

とある。神様側の愛が無条件に、「絶対愛」として貫かれている。この5章43〜48節は、福音の最高峰だ。更に、次のように話された。

「キリストにあつて新しくされた者、十字架の贖いを全存在で受け取った者には、こちらの内面の姿や外的な生活の状態に関係なく、十字架の救い（愛）は貫かれている、これこそがキリストの絶対・無因の愛です。十字架上の片一方の盗賊が悔い改めたとき、

『今日、汝は我とともにパラダイスに在るべし』

と言われたのも、この絶対愛の顕れです。私たちはこの愛を受け、日々の生活の中で詩篇103篇（旧約の中の福音というべき詩篇）を我が歌とし、感謝、讃美、祈りをもって生活することです。ピリピ書2章5節の

「キリスト・イエスの心を心とせよ」

とは、主キリストのこの絶対・無因の愛に生きることです。それを本当に受け取っているか、それが今、クリスチャンに問われているのです。」



## 聖旨の如く我に成れかし

2017年5月21日

### 聖書朗読 マタイ6章19〜34節

今日は、13日、14日に御殿場で行われた「福音特別セミナー」で話されたことを中心に講筵がもたれました。出席されたMさんによると、先生のお話は、次の時代にどのようなして福音を伝えるかを念頭におかれて、私たちに對し、福音の実践の在り方を根源的に問いかけるという極めて刺激的な内容であつたとのことでした。その意味では、京都からもつと参加すべきであつたかもしれません。

幾つかの問いかけの中で、先生が中心に据えられたのは、「主キリストの御意にかなうためには、日々の生活において何を最も大切なこととお考えでしょうか」という重要なテーマについてです。それを考える前提として、神様に逆らい、自己中心であるこの世は、厳しい闘いの場であるという現実を真剣に受け取る必要があります。福音に接することによって、地上での幸いや安心安樂を保証されていると考えるなら、それは皮相な受け取り方であり、正に悪魔の喜ぶところでは、決してこの世に安住することを保証していません。むしろ、キリストを深く受け取れば受け取るほど、闘いの場に投げ出されていくのです。キリストは、私たちに對し、小さい幸せに安住するのではなく、厳しい世のただ中で雄々しく戦う使命を託されました。

使徒行伝20章17節以下に、パウロが福音を証しするために血のにじむような苦勞をした記事がありますが、キリストは、私たちに同じ働きを求めておられるのです。

セミナーでの奥田先生のお話は、私たちに對し

「自分の幸せを求める内向きな信仰から脱却して視野を広げ、主様が私たちに何を望んでおられるかを真剣に受け取り、それにどのようなようにお応えしてゆくかという伝道者としての自覺と使命感をもつてほしい。」

と訴えられているように受け止めました。そして、ヨハネ6章27節の「永遠の生命にまで至る糧」の意味を通して、キリストから託された使命を實踐するにはどのような方法があるかについて一つのヒントをいただきました。

「永遠の生命にまで至る糧」を得るためには、パン（この世の価値）を求めることを目指して働くのではなく、与えられた仕事がどのようなものであつても、その中でキリストご自身を求めるという働きをする、働くことの中にキリストが生きておられるという働きをする、働きそのものが祈りであるという生き方をするということです。そのような働きは、キリストによって祝福され、働きの中に主の祝福が現れます。その模範は、讚美歌121番（「まぶねのなかに」）で歌われているキリストの姿であり、私たちが帰るべき出発点になります。





## 聖霊降臨節を前にして

2017年5月28日

聖書朗読 ルカ伝12章49～50節、使徒行伝1章3～9節

聖日の朝、窓から差し込む光がまぶしく、少し早く目が覚めた。静かな早朝のひとつとき、短い時間でも御言葉に触れることができる日は幸いである。

今日の講筵は、来週の聖霊降臨節を前に、新約聖書の「聖霊」<sup>みたま</sup>に関する記事に注目し、主キリストが私たちに約束してくださった聖霊の生命<sup>いのち</sup>に迫ることにした。私たちの集会では

「聖霊」・「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法」

を最も大切な賜物として教えて頂いてきた。今日はコリント前書、ローマ書、ヨハネ伝福音書及び詩篇から御言葉を拾った。

コリント前書1章～3章に「宣教の愚か」とか「異邦人には愚か」とか、

「この世の知恵は神の前に愚か」

とある。これは、十字架の事実を愚かとする者は滅びに至ること、御霊のことは霊によらなければ分らないことを指す。パウロは神の前に「愚か」に徹し、宣教に当たって

「イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり」

として、「御霊と能力との証明」によった(2章1～5節)。当時、愚かな伝道と見えたパウロの働きが、その後、世界伝道を支えることになった。

ローマ書では、8章が御霊のことを深く語っている。自己中心的な「肉の人」から、神中心の「霊の人」への新生が大事であり、その新生は、神の御霊によつて為され、人を生命<sup>いのち</sup>と平安に導く。神の御霊に導かれる者こそ「神の子」である。

ヨハネ伝20章では、復活のキリストが弟子たちに現れ、弟子たちの平安を祈り、「聖霊を受けよ」と語られている。聖霊の促し、力によつてこそ地上で本当の働きが出来る。また14章では、「助け主」である「真理の御霊」が、私たちと一緒に居てくださり、知恵と平安<sup>みなもと</sup>の源になつてくださることが約束されている。

奥田先生は、聖霊の人に伴うこととして、「平安」、「喜び」、「人に不思議な安らぎを与えること」と話された。また、いつも御言葉に触れていること、御言葉を基として祈ることが大事であると語られた。最後に詩篇119篇の御言葉を幾つか読んだ。中でも

「汝の聖言は、わが足の灯火、わが路の光なり」(詩篇119篇105節)

にひかれた。

次の聖日は聖霊降臨節集会。豊かな聖霊のご臨在を、心を一つにして祈りましょう。



## 聖霊の降臨

### ――父神の約束の成就――

2017年6月4日

聖書朗読 使徒行伝2章1～24、32～36節

「また火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人の上にとどまる。」（使徒行伝2章3節）

「イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて、汝らの見聞きする

此のものを注ぎ給ひしなり。」（使徒行伝2章33節）

聖霊降臨の約束は一時代や一族に限られたものではない。先生は、御霊様の聖なる感化は世の終わりに至るまで、キリストに従う者の上にあると講筵なさった。

ペンテコステから現代に至るまで、主様に全托してきた人々に助け主が送られてきた。生涯、聖霊様が豊かにとどまった人々は、この世における徴となり、不思議となります。先生は、天使や人々の前で、人の心を変える贖いの十字架愛の力を顕しておられます。御霊様の剣は、新たに研ぎ澄まされ、天来の靈光に輝いて、我々の腹へと突き進み、

「父なる神・御子キリスト・御霊のキリスト・我」

の「四位<sup>よんみ</sup>一体」の現実が成就されています。

また先生は、救霊の働きをするのにふさわしい者となることができるように、祈ってくださいました。結婚して子を産んだから幸せであるのでも、独身で子を産まぬから不幸なのでもない。要は御霊様の子を産むか産まぬか、自分自身が、まず御霊様の子として新生しているか否かが問題です。自ら新生せずしてどうして霊の子を産むことが出来ましょう。

### 補遺

御霊様の子である召団員は、どんな場所にしようと、どんな境遇にあつても、御霊様は共に住んでくださる。弟子たちに語られた言葉は、同時に我々にも語られている。助け主は彼らのものであるばかりでなく、我々の中にも居られる。どんな緊急の際でも、この世の苦しみの真つただ中にあつても、御霊様は、もがき、格闘している魂を支える力を授けられる。また、失敗や誤りに気付かせてくださる。悲しみや苦しみの中で、見通しは暗く、未来は難問題ばかりのように見えるとき、また、どうしようもない孤独感に襲われているとき、こうした時こそ、聖霊様は信交の祈りに答えて、心を慰めてくださいます。感謝！



## 愛——神の愛、神への愛、人への愛——

2017年6月18日

## 聖書朗読 ロマ書13章8節～14章9節

今回の集会は、「愛」——神の愛、神への愛、人への愛——と題して、ローマ書を中心に学びました。集会で奥田先生が語られた言葉の数々を、以下にお伝えいたします。キリストの御心や、それを受けての奥田先生のメッセージが伝われば幸いです。

神の義(天の父の御心)我々の想像を絶した、生まれながらの我々には到底実現不可能な靈的次元。正しさの貫き)と愛(赦し)は、キリストの十字架において一つ。

キリストの愛は、我らの不義(自分の頑張りでは、天の父のような全き姿になれない、キリストのような生き方・振る舞いができない我々の肉の弱さ)を背負って、我らが受けるべき裁きを引き受けて、代わりに赦しを与える愛。単なる、よしよしの甘やかす赦しではない、裁きを十字架において引き受ける、厳粛な事態の赦し。

キリストから不義を赦された我々は、キリストに倣<sup>なら</sup>う者として、現実の中での生き生きとした愛(苦しむ人の重荷を担う働き)が実証されなければ、世の苦しんでいる人には届かない。生まれながらの自分に誇れるものはないけれど、キリストから愛され、赦された結果、キリストを慕う・敬う者とされると、キリストの愛がひとりでに流れ出て、他を潤す存在となっていく。

クリスチャンは、人を引き付けるような魅力・チャーミングさ(聖霊による賜物)が大事。敬して遠ざけられるようでは、本物ではない。本当のクリスチャンは、神(天の父)に喜ばれ、人々に信頼される存在。

クリスチャンは、掟を守る云々以前に、キリストに愛されている・大事に思っ頂いているという自覚が必要。どんなマイナスも、あらゆる思い煩いや憂いも、キリストが十字架で引き受けて赦してくださっているよ、との自覚。

年老いてこそ輝くのが、クリスチャン。

キリスト抜きなら、神(天の父)は義の神・怖い神<sup>こわ</sup>。



## 愛——ヨハネ第一書より——

2017年6月25日

聖書朗読 ヨハネ第一書3章1～3節、4章7～14節

最近のご講筵は、聖書の様々な箇所から、キリストの「愛」について深い内容を語られることが多くなりました。今日は、ヨハネ第一の手紙を中心に「人の愛」と「神の愛」が根本的に異なることを語られました。人間の愛は、対象が美しいからとか、自分にとって利益になるからなど、何らかの理由に基づくもので、その本質は自己中心の愛です。そのような愛は、自分にとって理由（利益）がなくなった時でも持続するものでしょうか。

これに対し、神様の愛は、アガペーの愛です。利益とは無関係に、与えてやまないという「無限にして無償の愛」なのです。神様から愛されたキリストは、私たちに対して、

「父が私を愛されたように、あなたがたを愛した。私の愛のうちに居なさい。  
私があなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」

と「神の愛」「キリストの愛」をもって隣人を愛するように求めておられます。

私たちは、自分の力ではキリストと同質の愛をもって人を愛することはできません。主キリストから「愛」を頂くほかありません。そのためには、主キリストから愛されていることに気付くこと、「十字架の愛のキリスト」を瞑想し、

「主様、あなたがいつも私の中に居てください、私をあなたの中に居らせてください」と

との祈りを重ねて行くことが大切です。それには、聖書を第一として、み言葉に親しみ、み言葉と一如一体とされて行くことです。その人には、キリストの生命である霊（聖霊）が注ぎ込まれます。そして、

「主様、あなたのお役に立たせてください。」

という願いがわき上がり、隣人に対して色々な形で愛の業を行うことができるようになります。キリストは、自分に全托して愛の業を行う人を祝福されて、

「わが愛に生きよ。」

と励まし、その人でなければできない大切な仕事のために用いてくださいます。

日曜日ごとに、キリストから聖霊の生命を注入していただき、別次元の力をもらって、「私を選んでくださったキリストを見てください。」

と世に告白してゆきましょう。この世は、神様とは別の原理で動いているので、多くの戦いがありますが、み言葉を武器とするかぎり、この世に打ち負かされることはありません。





## 神の義、神の愛

2017年7月2日

聖書朗読 イザヤ書43章1〜7、14〜21節

やっと梅雨らしい雨の日が多くなった。今日、集会場の講筵台には薄紫色のアジサイが飾られたが、梅雨にピッタリの物静かな花である。

今日の講筵は、神様、キリスト様からの私たちに対する「義の貫き」と「愛」について、イザヤ書41章から48章までの御言葉に目をとめた。そのあと、時間の関係で十分触れることが出来なかったものの、ローマ書にある「神の義」へと話が進んだ。

イザヤ書では、神の熱愛、力強い救いの言葉に圧倒される思いだった。神様は、私たちを、「わが僕」、「わが友」と呼び、「選んだ故に棄てない、助ける、支える」と言われた。そして「われ、汝を贖えり、汝の名を呼べり、汝はわが有なり」

と、私たちを神の御意を行う者とした、と宣言された。更に私たちに霊を注ぎ、恩恵を与え、川のほとりの柳のごとく成長させ、「我は義を行い、救いを施す神」であって、

「汝の年老いるまで、白髪となるまで汝を負う」

と。このように、小さな存在の私たちに目をとめ、救いに導き、神の子としたのは、他ならぬ

「神の栄光のため、神の誉れを述べしめんがため」

つまり神の側の意思であると言う。神様の側の御業が先にあり、

「既に贖いを成し遂げた、お前はもう神の子だ、大丈夫、私に従ってきなさい」

と手を差し伸べてくださっている。それを私たちは「はい！」と受け取るだけ。

神の「義」は、「審く義」ではなかった。十字架のキリストにおいて「救いの義」、「愛」となつて現れた。その消息は、ローマ書1章16〜17節、3章21節以下に宣言されている。

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」

「功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり」

と。私たちを審くと思われた神の義は、キリストにおいて、私たちを贖い、助け主「聖霊」を付与する恩恵であった。それは神の愛、神の憐れみだった。そのことも「はい」と感謝して受け取りたい。

集会後、姉妹方手造りの「炊き込みご飯」を頂き、その後、総会で夏季福音特別集会の相談、屋根改修工事終了の報告等がなされた。



## 福音の継承

2017年7月9日

聖書朗読 使徒行伝20章17～38節

「われ今なんぢらを、主および其の恵の御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。」（使徒行伝20章32節）

長老たちがパウロの招きに応じて参集した時、パウロは感動的で力強い勧告と告別の言葉を語り告げた。

「今日、この日にあなた方に断言しておく。わたしは、すべての人の血について、なんらの責任もない。主様の御旨をあますところなく、あなた方に伝えただけである」と。

パウロは、群れの中に罪を抱いている者があれば、警告の言葉をさしひかえるようなことはしなかった。もし彼らに何の警告も与えず、放任しておけば彼らの魂の責任をパウロが負わなければならない。真理を忠実に教えた教師だけが、その働き最後において、パウロと共に、

「われは凡ての人の血につきて潔よし。」  
とすることができると言っています。

召団員一人ひとりが福音を体現し、福音体となって福音の証し人としての使命を果たすこと、福音を接する人々に伝え、次の世代への継承に力を尽くすことが大切です。そして、命の道の伝達者また祭司として、真理がそしられるような口実を与えてはならない。キリストの御名の栄えを維持・継承しなければならない。召団員は、その献身と純潔な生活と敬虔な言行によって、崇高な召しにふさわしい者であることを証ししましょう。

さらに、どうしたら、時代の悪い趨勢に打ち勝って、新鮮な愛の福音体を現代に、そして次の世代に、形成し、伝達・継承していくことができるのかを、真剣に考え、祈って行きましょう。

そして、夏の福音特別集会に向かって、祈りを深めて行きましょう。



## 一粒の麦、地に落ちて死なずば

2017年7月23日

聖書朗読 ヨハネ伝12章20～36節

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」と題して、奥田先生は、先日105歳で亡くなった医師の日野原重明氏のクリスチャンとしての在り方に一つの不満を述べられました。

「彼は、あれだけの事業と長寿を賜りながら、メディアでキリストのことを語らなかった。キリストのことを持ちだすと、メディアは彼を取り上げなくなるから。

そのことを避けたように、私には見えた」

と。キリストに生かされれば生かされるほど、キリストのことは表明せざるを得ません。表明すべき場所をわきまえる必要がありますが、メディアは言論や信条の発表の場でもあるはずですから、ある意味で、正しくキリストを伝える絶好の機会と言えます。奥田先生は、

「私が日野原氏のような立場なら、私はキリストのことを伝える」

と話されました。本当にキリストに生かされるということは、この世においては、キリストと共に十字架で葬り去られることを覚悟しなければならないと、改めて思われました。

我々は、この世においては、既にキリストと共に十字架で葬り去られた者ですが、キリストが聖霊をくださる限りは、絶対にこの世に打ち負かされることはなく、むしろ力強く世の人々のために働くことができるはずです。この世の評価や栄誉には目もくれず、ひたすら主にあつて世に仕えて行く。このことでしか正しくキリストを理解し伝えることはできないように思います。

「福音は、労働者のためのものです」

と奥田先生は言われます。キリストの働き人として、誇りを持って世の人に仕えて行きたいと思います。

集会の冒頭、先生はヒルティーの本の内容を紹介してくださいました。その中で、感銘を受けた言葉を以下にご紹介いたします。

「信仰は、人間らしい健全な常識と、眼に見えないものに依り頼む勇氣とが、また実行力と帰依とが正しく結合されたところに成り立つ」

「福音書のキリストの言葉の真理性は、誰でも実験することができ、したがって決して文字どおりに「信じ」なければならないものではない」



## 真の礼拝

2017年7月30日

### 聖書朗読 ヨハネ伝4章1〜26節

遠き地にあつて普段、京都の集会に出られない主にある兄弟姉妹が遠路、京都集会を訪ねてくださり共に主を讃美できることは、迎える側も嬉しき100倍、礼拝に花が添えられる。今日の講筵の主題は「真の礼拝」。私たちは日曜日ごと、聖日集会に導かれ、キリスト讃美と祈りの時を与えられている。奥田先生は、

「ヨハネ伝4章21〜24節の『霊と真とをもつてする礼拝』とは、単に聖日の「集会」（教会では「礼拝」という）を守ることだけではなく、一人ひとりの全生活で主を讃えること、主の御意に沿って精一杯、キリスト讃美の生活することである」と語り出された。

先生は、先ずロマ書12章1節〜2節を引かれ、次にコロサイ書に進まれた。ロマ書に、  
「己が身を神の悦び給う潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり」

とあるように、自分の全存在を主にお預けすること、日常のあり方が主に喜ばれるような生活であることが「真の礼拝」であると。また、神の御意を知るために、「心を更えて新たにせよ」とあるが、そのためには、生来の自分（旧き我）のままで「心を更新する」のではなく、新しい人にされていなければならない。ヨハネ伝3章に、

「人は新たに生まれなければ、神の国に入ることができない」

とあるとおり、日々の祈りの中で、上からの新しい誕生を賜わって歩むことが大切だ、と。コロサイ書にあるとおり、主は十字架により私たちを暗黒の権威から救い出して御子の国に移してくださった。既に十字架で死んだ者であり、古き人を脱ぎ捨てて新しい人に造り替えていただいた。これにより私たちは「詩と讃美と霊の歌とをもつて」神讃美ができるようにしていただいた。したがって、

「為す所の凡ての事、言、行為、みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ」

とあるとおり、

「日々の生活がキリスト讃美であり、真の礼拝である」

ことを心から受け取ることが出来る。こうして、目を覚まして祈りを常にし、主キリストに事え、日常生活を主にお預けし、日々の生活が「真の礼拝」であるようにと、導いて頂きたい。

この4月、宇和島から郷里の徳島に転勤されたHさんが、お忙しい中、元気なお姿を見せてくださり、一同で喜びを共にし、感謝の祈りを捧げた。





## 我を食らい、我を飲め

2017年8月6日

聖書朗読 ヨハネ第一書3章1～3節、4章7～14節

台風の影響による酷暑の日曜日でしたが、多くの出席者があり、特別集会に備えての祈りの集会が持たれました。兄弟姉妹がキリストと共にある生活を次々に証言され、先生の願っておられる集会になりました。先生は、ご講筵の最後に

「今日は漫談風に語った。」

と感想を述べられましたが、その中の珠玉の告白を紹介します。

キリストは、ご自身には何の罪もないのに苦難の生涯を送られました。そのようなキリストのお姿を見ると、どのような困難に出会っても堪え忍んで、このお方とともに生きたいという願いが湧いてきます。キリストは、あなたの傍らにあつて、

「現実がいかに厳しく苦しくとも、御霊の私があなたの中に宿れば厳しい現実を耐えてゆく力と勇気を与えるから心配することはない。」

と励ましてくださいます。

キリストは、私たちがキリストと苦難と栄光をともしして、この地上で鍛え上げられて天国に凱旋することを願っておられるのです。御霊のキリストが宿る人は、地上の姿がどのように惨めなものであっても、永遠の生命をいただいて天国へゆくことができるようにキリストは備えておられるのです。

キリストの御霊は、ある日突然に与えられることもありますが、大事なことは、日々聖書に親しみ、祈り心でキリストの言葉を実践してゆくというたゆまぬ努力です。すなわち、

「我を食らい、我を飲め」

との御言葉を体受・体得してゆくことです。それを積み重ねることによって、知らず知らずのうちにキリストの聖霊が内に宿り、古い自分から解放されて御霊の人になってゆきます。そして、御霊の人に変貌した時に、苦難の現実を突破することのできる思いがけない力が与えられます。

引用聖書…詩篇62、63篇、エペソ書1章、ヘブル書7、9ないし12章

この夏の特別集会には、「ヨハネ伝福音書を身読する」という主題のもとに宿題が課されています。あと20日に迫りましたが、ヨハネ伝の中からキリストの思いを読み取り、特別集会を転機として新しい人に生まれ変わりたいと願っています。



## 新しき人、旧き人

2017年8月20日

聖書朗読 ヨハネ第一書4章7～21節

「神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給ふ」(ヨハネ第一書4章16節)

キリストが心に住む人の生活は、敬主の心を行いに現します。  
純粋な教えは正義の働きとよく混じり合い、天来の教えは聖なる実践と調和します。  
みたまとみことばが宿っているなら全て成就します。

クリスチャン(天国人)とは、どのような人でしょうか？

全人的に新しく生んで戴いた人(霊止)、新しい命を戴いた人。  
流れが清くなるには、心の泉がきよめられなければならない。

自我と罪に対する死があり、まったく新しい命がある。

この変化は聖霊様の働きによつてのみ行われる。

風自体は目に見えないが、風によつて生ずる結果は見たり感じたりすることができる。

同じように、魂に対する聖霊様の働きは、その救いの力を感じた人のすべての行為に現れます。

聖霊様が心を占領されるとき、それは生活を生まれ変わらせる。

罪の思いは退けられ、悪い行為は放棄され、愛と謙遜と平安が怒りとねたみと争いに入れ替わる。

喜びが悲しみに入れ替わり、顔には天の光が反映する。

人間の目でみることでできない力が、主様のかたちにかたどって新しい人間を創造する。

先生は、84年の生涯を通じて深められた経験を証されました。

「自我(肉)は日毎に死に、キリスト様と共に新しい命が生まれる(日々新た)」

これが積極的な生き方の秘訣であり、困難に対する道であると説かれました。

ここに死して生きるというヨハネ身読経験の極致がある。



## 神様からのラブレター ヨハネ伝

2017年9月3日

## 聖書朗読 ヨハネ伝17章1〜11節

今日は、特別集会の感謝集会でしたが、予想以上に多くの兄弟姉妹が出席されて、数名の方が特別集会で受けた恵みを語られました。ご講筵は、「神様からのラブレター ヨハネ伝」という珍しい演題で、特別集会の続編を語られました。ヨハネ伝は、読まざるを得ない書である、私たちに一番大事なものを語りかけている書であると強調され、先生のヨハネ伝に対する熱い思いがひしひしと伝わってきました。

以下に、講筵の要旨をお伝えします。

私たちの集会は、少人数であるけれども、一人一人はキリストから直々に選ばれたエリートです。私たち自身は、たとえ非力であっても、私たちの中に宿られた御霊のキリストの力は絶大で、非力な私たちを通して御業を展開してゆかれます。キリストは、その愛をいただくに値しない私たちを選ばれて、世を担い、救ってゆくという重大な使命を託されたことをしっかりと受け止めてください。

ヨハネ伝は、随所に、私たちにキリストと同質の高い霊的次元の中に生きなさい、生活の中でキリストの御言葉を実践しなさい、とのキリストの言葉が語られています。これを本当に自分のものにするためには、各人が毎日、真剣に聖書を身読して、聖書の中のキリストの御言葉を土台にして日々勝利の生活を送ること、御言葉が各人の生活の原動力になっていることが大切です。

このようなキリストの言葉は、正に私たちの人生の応援歌というべきものです。確かに、私たちは、現実には多くの困難な問題を抱えています。しかし、キリストは、

「苦難や艱難は私が引き受けた、私があなた方を命がけで守るので一喜一憂して動揺することなく、現実を突き抜けた霊的次元の世界で生きよ、大肯定の世界で生

きよ、そこに本当の平安がある」

と言って、慰めと励ましを与えてくださいます。

私たちの信仰が本物であるかどうかは、

「常にキリストと一つとなっているか、キリストの御言葉が私たちの中で実現しているか、霊の次元で瑞々しく活き活きと生きているか、愛をもつて仕える姿に徹しているか、神讃美を人生の目標にしているか」

にかかります。キリストから命をいただいていることに日々感謝して、内なる光を赤々と灯して、困難に負けずに生きてゆきましよう。



## 旧約の福音

——詩篇103篇ほか——

2017年9月10日

## 聖書朗読 詩篇103篇

9月に入って、やっと朝晩に涼しさが感じられるようになった。夜は虫の音の大合唱が耳に心地よい。

今日の講筵は、イザヤ書40章、53章、55章の他、詩篇103篇から、旧約聖書にある福音を学ぶこととなった。旧約聖書は、新約聖書のバックグラウンドとして出来るだけ理解する必要があるところ、その中には福音の光から見て注目すべき御言葉が幾つもある。以下、本日の講筵で印象深かった箇所を記載する。

イザヤ書40章では、

「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」

とある。走って疲れない者はいないが、この御言葉を「然り」と受け取り、上からの新たな力を戴いて走るところに、人の思いを超えた力が与えられる。これは走ることに留まらず、主にあつて働くところ、我が思いを捨てて努力するところにも、天来の力が注がれる。イザヤ書53章は「主の僕の歌」であり、キリストの生涯そのものの預言である。この章は、地上で私たちと同じ姿となって生き、最後には十字架への道を敢然と進まれた主キリストの姿を思い浮かべながら、繰り返し読み、十字架の高さ、深さ、愛の広さを深く受け取る以外にない。

イザヤ書55章では、渇く者に水の所に来るように、無代価でぶどう酒と乳を得よとあり、併せて主に聞き従うことが勧められている。私たちはキリストに目をとめていただき、「神の子」として恩恵に恩恵を加えられる者としていただいた。

「我に来りて聞け、汝らの魂は活くべし」

とあるが、主の懐に入り「活ける水」を無償で飲ませてもらって、新しい生命に生きる者としていただいた。

詩篇103篇は、「旧約の福音」と言われ、神讚美のうるわしい歌である。

「わが靈魂よ、主を讃めまつれ、その凡ての恩恵を忘るるなかれ。」

とある。この詩篇は、主からのラブレター、応援歌であると同時に、主が為してくださいったこと、主の仁慈いつくしみに対する私たちの感謝でもある。

主に在る者には感謝と讚美が自然に伴う。神讚美、神中心の生活を貫いていきたい。





## 神の奥義なるキリスト

### ——コロサイ書の焦点——

2017年9月17日

#### 聖書朗読 コロサイ書3章1～17節

今回の集会は、台風が近づく中で行われました。集会員の方々は、台風の影響を心配しておられましたが、奥田先生は、

「主が一言発すれば、台風も静めることができる。ほんとですよ。台風で足止めに  
なれば、皆で祈り会をすれば良い」

と楽しそうに話されました。集会に集うということは、主に感謝し主を讃美することです  
から、そのような気持ちで皆が集まれば、主は決して我々を放っておかれない、むしろ台  
風が近づく中集まった我々を祝福してくださるに違いはないと思いました。必要なことは、  
我々一人一人が主と個人的なつながりをもつて、主に感謝する気持ちで集まることだと思  
います。奥田先生は、

「この集会に、主に感謝し主を讃美する以外の目的で来る人は、つまらなくなると  
思いますよ」  
と言われます。

「自分は煮ても焼いてもどうにもならない、ほとほと自分に愛想を尽かした人でし  
か、主の有難みは分からないのではないのでしょうか」

と。小池先生は晩年、

「私はキリストを信じてなんかないません。キリストに圧倒されて生きています」  
と話されていたそうです。キリストの十字架の贖罪の有難みと聖霊のもたらす平安を味わ  
えば、我々はただ主の前に平伏すのみ、この身をささげる他はない、自ずと「主よ、七難  
八苦を我に与えたまえ！」という祈り願いが沸き起こるのだと思います。そういう人は、  
主の十字架を負う中で、適ったときに主の平安が臨むことを体験しているのです。

サンダー・シングの本には、

「人は好むと好まざるとにかかわらず、十字架を避けて通ることはできない。キリ  
ストの十字架を負うことがなくても、この世の十字架を負わなければならないか  
らである。主の十字架に比べて一見軽そうに見えるこの世の十字架の結果は、奴  
隷死である。」

と書かれてあります。

キリストの御心を拒んで、この世の十字架を負えば、初めは自由に見えても最後は破滅  
に導かれてしまうのです。人は、主に立ち帰ることが必要です。



## 主に会い、主と語る

2017年9月24日

## 聖書朗読 詩篇84篇

「わが靈魂は絶え入るばかりにエホバの大庭をしたひ、わが心わが身は活ける  
神にむかひて呼ばふ。」（詩篇84篇2節）

先生は、

「日々、聖書において主様に出会い、主様と語り合っているように生活しています」

と講筵されました。主様は交わりを欲して居られ、わたしたち一人ひとりが、聖書のみ言葉と一つとなつて、主様の中へと信じ入り、祈り入ってくるのを待つて居られます。そのような、主様との触れ合いの祈りの中で、主様の生命が流れ込んで来ます。

詩篇記者は、84篇において、次のように讃えている。

「なんぢの家にすむものは、幸福なり」

「その力、なんぢにある者は……力より力にすみ、……遂に、おのおの、…

…神にまみゆ。」

「なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり。」

85篇においては、

「憐れみと真実とともに会い、義と平和と互いに接吻せり。」

86篇においては、

「ねがはくはわが靈魂をまもりたまへ」

「主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく、汝のみわざに等しきも

のほなし。」

91篇においては、

「彼その愛をわれにそそげるがゆゑに我これを助けん」

主様のことにについて広く深く長い経験のある先生の講筵は、詩篇の中に、イエス様の新しい美しさを顕現されています。宝石箱からたくさんの新しい宝石を取り出している。

この無限の宝庫から召団員の前に夢にも思わなかった富を取り出してみせる。

私達が、もうとつくに深くまで考察したと考えている多くのよく知っている聖句から、新しい、素晴らしい光が輝き出ている。



## 御霊の賜う自由

2017年10月1日

### 聖書朗読 コリント後書4章(全)

今日は、23人の兄弟姉妹が参加され、集会場が満員になりました。先生は、自宅を整理していたら出てきたと言って、京都・嵯峨 小倉山二尊院の「心の糧七ヶ條」という書面を配布され、

「此の世の中で一番楽しく立派なことは生涯を貫く仕事をもつことである」

「此の世の中で一番素晴らしいことは常に感謝の念を忘れず報恩の道を歩むことである」

「此の世の中で一番尊いことは人のために奉仕して決して恩に着せないことである」

などの箇条は、ヒルティに通じるものがあり、私たちの目標にもなると紹介されました。

今日は、「御霊の賜う自由」という主題で、コリント後書4章を中心に、ピリピ書1章、3章、ロマ書8章、詩篇130篇、138篇、139篇等を引用されて、一人ひとりがキリストと直結し、キリストと一対一となることによつて、何事にも捉われない自由な生き方をすることを願っていると言われました。誰でもこの世では苦労や悩みがあります。迫害を受けることもあり、肉体自体の安全も保障されている訳でもありません。しかし人生においてマイナスと思われるところにおいてこそ、キリストと出会うチャンスがあります。キリストに出会った人が、キリストから

「この世では苦労があるが、それでも私についてくるか？」

と問われ、キリストと苦しみを共にしたいという気持ちになる時に、今度はキリストから患難の中を生き抜く逞しい力を与えられます。現象界には様々な出来事がありますが、その奥には神の深い顧みがあることを固く信じて、目先の心配事や将来の不安に縛られず、どんな境遇にあつてもへこたれることなく、運命、環境を乗り越えて生き活きと生きていることが、「御霊の賜う自由」なのです。そして、キリストは、私たちが年とともにこの地上で輝いてゆき、人々にどれだけ幸せを運んであげたかを求めておられます。運命や境遇の問題ではありません。今置かれたところで輝き、地上に命がある限り、キリストを伝えることが、キリストから私たちに与えられた使命なのです。キリストは、

「使命を与えたからには私が全責任を持つので心配するな、御国に行くことは保証しているよ」

と励ましてくださいます。私たちは晩年になればなるほど、体験したキリストの恵みが豊かであつたことを証しすることができるよう日々祈りの中で生活してゆきましよう。



## わが福音

2017年10月22日

## 聖書朗読 ヨハネ伝6章32～51節

今日の講筈は、奥田先生が賜った福音を、ヨハネ伝の御言葉をたどりながら語っていた。だくとともに、私たち召団員に、福音の継承・発展の取り組みを問うものだった。先生は、今後、5か年計画として、京都キリスト召団の発展のためのプラン（未来図）を自分なりに考え実行したいと話され、召団を支える私たちにも、その計画を立て、それを実践して欲しいと話された。その指摘は概ね、次のような事だった。

1、自分が賜ったキリストの福音を、自分の言葉で周りの人に話せるように、そのエッセンスを書き記すなどして明らかにしておくこと。

2、京都キリスト召団の一員として、福音の継承・発展のため、実現可能な目標、ビジョンを考え、実行して欲しい。

今日、先生は、ヨハネ伝にあるキリストの御言葉を1章から順に追っていかれた。私は、集会だよりを書きながら思った。私たちがキリストの弟子であるなら、その御言葉の中に、プラン、目標への指針があるかも知れないと。それで、以下に、今日、目を止めたキリストの御言葉を振り返ってみる。集会だより作成者の思いも付記する。

「人あらたに生れずば、神の国を見ること能はず。」（ヨハネ3・3）

これまでの自分の考えでは新しいプランは出てこない。上からの新生とキリストへの信頼から、新たな発想が出てくるのではないか。

「我は生命のパンなり……人このパンを食はば永遠に活くべし」（ヨハネ6・48  
～51）

「知恵と力、望みの忍耐など、キリストには知恵と知識との凡ての宝、蔵れあり」

とある。このパンをしつかり食らい、生命の言葉を発信したい。

「我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。」（ヨハネ10・11）

キリストは迷う羊を生命がけで護り給う。求めの切なるにより正しい福音へ、各自が為すべきことへと導いてくださる。牧者と羊は一体だ。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。」（ヨハネ12・24）

めぐみ  
恩恵受けていながら、福音を告白し、召団を支える小さな柱となるのに、自分を惜しんでいないか。自分を本当に差し出しているか。





# 福音書を読む

## 第1回

2017年10月29日

聖書朗読 マタイ伝4章1〜17節

「答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる

凡ての言に由る』と録されたり」(マタイ伝福音書4章4節、申命記8章3節)

キリストに従う者にとつて、主様に仕えることと世俗の事業に従事することが両立しない場合がしばしばある。戒めに従えば生活の手段が断たれるように見えるであろう。だが、この世において信頼できる唯一のものは主様の御言葉です。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ伝6・33)

「パンを否定しているのではない。パン(経済生活)よりも御言葉がもっと大事だ。

イエス・キリスト様のところに来てごらん、この世の仕事も光ってくるよ。主様の栄光が現れるように転換して、ひかり輝くよ」

と先生は、実をもつて講筵されました。

世の中のほとんどの人々は、成功と繁栄に関心を持っている。

福音書を深く読むと、主様も私達の成功に関心を持っておられ、御霊の子である私達にも成功と繁栄を手にしてほしいと望んでおられます。

しかし、ここで言う成功や繁栄とは、経済的なものだけではありません。召団員の目的や目標はこの世のそれとは異なる。召団員の持つ基準や価値観もこの世とは異なる。召団員が望む成功とは、主様がご自身の栄光のために用いて成し遂げたまう成功であり、経済的な成功や繁栄以上のものです。御霊の子らが平凡ではなく、非凡であり、月並みな人間ではなく、栄えある成功者となるべきであるとは、実に理にかなっていることではないでしょうか。私達は不満に思ったり、失望したり、気落ちするのではなく、晴れやかで活き活きと、喜びに満ちて生きている事を主様は喜ばれます。ストレスや心配などの重荷は主様に委ねることで、平安と力、繁栄が与えられます。なぜなら、毎週、集会ライブにて御霊のイエス様に会い、この主様との霊的交わりをさせていただいているからです。



## 祈り

## ――福音書を読む(第2回)――

2017年11月5日

## 聖書朗読 マタイ伝6章5〜15節

今日は、「祈り」と題して、祈りの本質とは何であるかを語られました。

神様に対し、自分の願望を聞き届けてください、何らかの利益を与えてくださいと祈ることは、本当の意味での祈りではありません。そのような祈りは、神様の御心(御意)を求めるものではなく、神様以外のもの(自分の幸福や利益など)を神様以上に大切にすること、自己中心の「肉」の祈りであって、御心(御意)に合う祈りではありません。

聖書には、本当の祈りとは何かを記述した箇所が幾つかあります。

マタイ伝6章5節から15節、33節、ルカ伝11章1節から13節、18章1節から14節、ヨハネ伝15章7節、16章23節、24節などです。ルカ伝18章13節の取税人の祈り

## 「神よ、罪人なる我を憐れみたまえ」

との祈りは、自分の立派さや功績と引きかえに恵みを得ようとするのではなく、自分の殻を破って主キリストに全身を投げ出した「ひれ伏し」の祈りの姿です。キリストは、このような砕けた魂の祈りを喜び、その人に聖霊を注いで命を吹き込み、霊魂を神の次元へと引き上げてくださいます(イザヤ書57章15節)。本当の祈りとは、主キリストを求めて主キリストと一つにされる行為のことです。ヨハネ伝6章53節以下でキリストが

## 「我を食らい、我を飲め」

と言われていることも同様です。「全身全霊でキリストのご臨在・ご内住を求めて祈れ。キリストと一つとされよ」ということです。朝顔や向日葵<sup>ひまわり</sup>の姿のように、天に向かって「主キリスト様、あなたと一つにしてください」と祈る時に、真の平安が与えられます。また、生来の自分は弱くても、深い祈りの中でキリストと一つにされることによって、キリストから力を与えられます。そして、キリストと一如の姿の中で祈れば、その祈りは御心になったものとなり、キリストは聞き届けてくださいます(ヨハネ伝15章7節)。ヨハネの第三の手紙第2節に、

## 「愛する者よ。あなたの魂がいつも恵まれていると同じく、あなたがすべての

## ことに恵まれ、また健やかであるようにと、わたしは祈っている」

とあるように、主キリストは私たちが霊の次元のみならず、この世の次元においても幸せであるようにと、祈ってくださいています。このような主キリストのご愛に応えるためには、絶えず、「ひれ伏しの祈り」を欠かさず、その中で使命を賜わり、主のために働きたいと願っています。



テモテ前・後書の意<sup>てもて</sup>

2017年11月12日

## 聖書朗読 テモテ前書1章1〜2節、12〜17節

本日学んだテモテ書はパウロが親愛なるテモテに書き送った手紙です。パウロとも言えども、その時代の常識にとらわれている面があり、パウロの言う事全てを盲信することはありません。キリストに生かされたパウロから、学ぶべきところを学ぶことが肝心です。以下に本日学んだ中で、素晴らしいと感じた箇所をお伝えいたします。

「この方（キリスト）はすべての人の贖いとして御自身を捧げられました。」（テモテ前2章6節）

十字架に架かる理由がない罪なきキリストは、我々を奴隷の軛から解放する為、死しか待っていない我々に死んでも死なない生命を与える為に、自ら十字架にお架かりくださり、犠牲となつてくださった。こんな方は世界中どこを捜してもいない。

「自分の親族、特に家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています。」（テモテ前5章8節）

キリストに従うことと、家族を世話し家族のために祈ることは相反しない。

「わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持つて行くことができないからです。」（テモテ前6章7節）

聖書すら、あの世に持つて行くことができない。聖書の御言葉を生き、体に刻み込むことしかできない。

「金持ちになろうとする者は、誘惑、罠、無分別で有害なさまざまな欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。」（テモテ前6章9節）

欲に目が眩むと、歯止めが利かなくなる。神・キリストを第一としてこの世で忠実に責任を果たしていれば、主は時に適つて、溢れるばかりに祝福してくださる。

「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」（テモテ前6章17節）

神・キリストの聖霊による祝福は、神そのものの豊かさを味わうことであり、味わえば、感激と感謝しかなくなる。

「神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。」（テモテ後1章7節）

我々に必要なのは、生きる力であり、知識だけではいけない。

「キリストは死を滅ぼし、福音（全キリスト）を通して不滅の命を現わしてくださいました。」（テモテ後1章10節）

クリスチャンの強みは死を恐れないこと。

「キリスト・イエスに結ばれて信心深く生きようとする人は皆、迫害を受けま

す。」（テモテ後3章12節）

あらかじめ覚悟しておけば、些細なことにも感謝できる。



## 最も大切な誠め

## ——福音書を読む(第3回)——

2017年11月19日

## 聖書朗読 マルコ伝12章28〜34節

京都は、紅葉真っ盛りの晩秋とは言え、早や初冬の肌寒さを感じさせる季節の中も、暑さ寒さは日々変われども、京都キリスト召団の兄弟姉妹からは恒に変わりのない温かさを改めて感じさせられる今日一日でもあった。今日の講筵は、主題である「最も大切な誠め」というイエス・キリストの教えの中の黄金律の一つとも言える箇所を聖書から学ぶものであった。この教えは、先ずは以下の新約の三箇所から集約されていく。

先ずは、マタイによる福音書第22章37節と39節にある

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」

であり、また、マルコによる福音書第12章30節と31節にある

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの

神を愛せよ」

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」

そして、ルカによる福音書第10章27節にある

「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの

神を愛せよ」

「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」

という微妙に表現が違いながらもイエス・キリストの教えの真理と奥義がこの新約の三箇所語られているのである。そしてこれら三箇所は、遡ると申命記第6章5節にある

「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さ

なければならぬ」

と、レビ記第19章18節にある

「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である」

という旧約の箇所につけていくのである。このように旧約から新約に脈々と繋がる聖書の教えの連続性と普遍性がここに読み取られる。この講筵で奥田先生が語られた「目に見えないものを信じることは、本当に難しいが、それを信じることによって主なるイエス・キリストの恵みに与ることができるのである」という言葉から、私は、「目に見えるもの、手で触れられるものを信じるのは、信じていることにはならない。目に見えないものを信じる時、勝利と祝福は訪れる」というエイブラハム・リンカーンの言葉と相重なるものを感じた。また、「人間は、苦難、艱難、不自由があるからこそ、幸いをくださる主に立ち還ることができるのである」という奥田先生の言葉は、私たちに大いなる慰めと勇気、そして希望を与えてくれるものである。これらの聖書の箇所と奥田先生の言葉を噛み締め、感謝と喜びを持ってこの一週日を過ごしていきたい。





## 荒野の試み（靈戦）

## ——福音書を読む（第4回）——

2017年11月26日

## 聖書朗読 マタイ伝4章1～11節

今日の講筵で奥田先生は、上からの迫りの中で、時に激しく、私たち集会員にキリストの<sup>もの</sup>有としての奮起と行動を促す熱いメッセージを話された。

奥田先生は、キリスト者として単に

「いい人に留まつていてはいけない、行動するクリスチャンでありなさい。この世の悪の靈に対し、聖靈の能力<sup>ちから</sup>によつて靈の戦いを戦う人であるように。」

と熱く語られた。私たちに、臆することなく、世の人・隣人に向かつて具体的に働きかける存在であるように、キリストと共に戦う人、闘士たれと、励ましと自覚を促す内容の言葉だった。奥田先生は、戦いの具体的な例として、キリストの「荒野の試み」の箇所を引かれた（マタイ伝3章16節～4章11節）。キリストは、神の御霊を受け、40日40夜の断食の後、「御霊の能力、神の御言葉」によつてサタンと戦われ、見事にサタンを撃退した。先生は、ヨハネ伝5章19節以下を引かれ、キリストが御自身を何者ともしない無者の姿に徹しておられたこと、そこに神様の力が100%働いたと話された。

ところで、私たちが戦士としてこの世に出て行くにあたり、どのような心構えと武装が必要だろうか。奥田先生は、小池辰雄先生の告白録『イエス眠り居給う』の中の「キリストの靈力」の箇所を引きながら、いつもキリストと一つにされていることが不可欠で、そのためには、十字架を深く受け取り、聖霊がこの身に、突破・突入・内住してくださることを祈り求めて行くことが大事であると話された。私たちの力の源・秘密は、「キリストの御霊（聖霊）」にあり、聖霊の力を身に体して戦士となるためには、聖書を身読し、聖書の場面を深く瞑想し、瞑想が祈りとなり、御霊の主キリストと一如であるとの実感（ガラテヤ書2章20節）を賜わることが大切だと語られた。このように今日、主キリストからの誠に熱いメッセージが語られた。集会だよりを書きながら私は思った。今日のメッセージを各自が自分の身で如何に実践していくかが深く問われている。課題はとても大きくて高い。ため息が出て下を向いてしまう。すると、小池先生の、

「○○君、□□さん、破れだよ、砕けだよ、ひれ伏しだよ。無者に徹することだよ。聖霊が力の源なんだからね。」

の声が聞こえるようだった。集会後、食事会、総会を行い、降誕節集会、公開講演会等について協議した。



## マリヤとエリサベツ

2017年12月17日

## 聖書朗読 ルカ1章39〜56節

今回は、来週のクリスマス集会の準備集会であった。

日本の多くの人にとってクリスマスは、ハロウィーンや正月、バレンタインデーと同じく、イベントとなっている。クリスマスがキリストの誕生を祝う祭と理解して過ごす人は日本では珍しい存在である。日本でキリストが正しく理解される日はいつか来るだろうか。我々の罪・咎・憂いを払拭する為に、生涯にわたって十字架を担い、我々に代わって我々が受けるべき刑罰をその身に引き受けて、我々の赦しを父に願ってくださったキリストの御愛が理解される日は。

キリストに救われた我々にできることは、キリストに倣う者として、キリストの十字架の苦しみを共にすることである。我々が人の為に苦勞して十字架を担う働き（無私の働き）をするとき、主だけはその苦しみを完全に理解され、完璧に慰めて希望を与えてくださる。その聖霊の働きなくして、主を離れては枯れ枝同然の我々に希望はない。

キリストの僕ヤコブの言葉（ヤコブ書1・2〜4）

「主にある者よ、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、（キリストの聖霊の働きによって）

完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になる」

イエス・キリストの使徒ペトロの言葉（ペトロ書1・6〜7）

「あなた方は、今しばらくの間、いろいろな試練に悩まなければならぬかもしれないが、その試練によって本物のキリスト者であることが証明される」

ルカ伝1・79、マタイ伝4・16

「（キリストが現れたとき）暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」

キリストの言葉：

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」

主は、傲慢な者を打ち散らし、魂の碎かれた者を高く上げられる（ルカ伝1・51〜53）。至極まつとうなことである。

